

追 加 関 連 論 文

(ナタマイシン (別名 : ピマリシン))

- 1 三井幸彦, 北野周作, 内田幸男, 田中直彦, 小林俊策, 徳田久弥, 大石正夫, 嶋田孝吉, 原二郎 . ピマリシンの角膜真菌症に対する効果の検討 . *日本眼科学会雑誌* (1982) 86: 2213-2223.

188 例の角膜真菌症をピマリシン点眼剤で治療し、著効 91 例 (48.4%)、有効 64 例 (34.0%)、有効率 82.4% という結果を得た。約半数の症例で視力が著しく改善した。治療の継続に支障があるような副作用は起こらなかった。分離された真菌の大部分のものにおいて、ピマリシンの最小発育阻止濃度 (MIC) は 1.56 ~ 6.25 $\mu\text{g/mL}$ の間にあった。

- 2 石橋康久, 本村幸子 . 真菌感染症 最近の動向 真菌症の臨床 眼科領域真菌症 最近増加している角膜真菌症と内因性真菌性眼内炎について . *臨床と微生物* (1988) 15: 335-339.

最近増加している角膜真菌症の年代別報告例の推移、発症要因、原因真菌、診断、治療及び内因性真菌性眼内炎の報告数の年度別推移、年齢・性差及び左右差、原因菌、診断、治療について述べた。日本における角膜真菌症の報告数は 1955 年以降に急増しており、原因真菌は半数以上が *Fusarium* 属によるものと報告されている。薬物治療にはピマリシン、アムホテリシン B 等が用いられる。

- 3 Ziogas BN, Sisler HD, Kusby WR. Sterol content and other characteristics of pimaricin-resistant mutants of *Aspergillus nidulans*. *Pesticide Biochem. Physiol.* (1983) 20: 320-329.

Aspergillus nidulans のピマリシン耐性変異株をポリエーテル抗生物質ピマリシンを含有する培地から選択した。ある変異体にはエルゴステロール含量が著しく減少していたが、他はほぼ通常のレベルであった。エルゴステロールを欠くほとんどの変異株はステロール C-22 不飽和の生化学領域を持っていた。C-14 脱メチル化阻害剤である fenarimol は野生株よりもこの変異株に毒性があった。一方、C-22 不飽和のステロールで不活性な変異株は oligomycin に耐性であったが、carboxin に対しては野生株感受性であった。